場所　鹿児島県瀬戸内町

面積　49.26ha

活動目的　藻場やマングローブの再生・保全を通じて、町の基幹産業である漁業や観光に必要な資源を維持し、人の営みと自然を両立することを目指す。



サイト概要

本サイトが位置する鹿児島県瀬戸内町は、奄美大島の最南端に位置し、加計呂麻島を挟んで海峡を有する港町があり、沿岸部はリアス式海岸となっており、サンゴ礁が形成され豊富な海洋生物が生息している。入江は漁業や避難港に古来から活用されており、地理的特性を活かした漁業は町の基幹産業であり、一本釣り、定置網に加えて、追込網、素潜り漁など伝統漁も継続して行われている。また、町内の小名瀬地区ではメヒルギ個体群が存在しており、マングローブの生態系が形成されており生物多様性を育んでいる。加えて、本サイトを含む町内の砂浜にはウミガメが上陸し、産卵を行う場所にもなっている。

生物多様性の価値

価値（１）公的機関等によって、生物多様性保全上の重要性が既に認められている場

【選定されている制度名】

本サイトは以下の制度により生物多様性保全上の重要性を認定されている
環境省　生物多様性の観点から重要度の高い海域　沿岸域　14601　奄美大島南西部

【選定理由や内容】

生物多様性の観点から重要度の高い海域
【選定理由】
　環境省によると、MARXANにより選定されたため。
【内容】
本サイトも含まれる、奄美大島の南西部及び加計呂麻島、請島、与路島等の海域が選定されている。奄サンゴ礁の形成や奄美諸島だけで確認されているミナミアナジャコの豊産、アオウミガメの重要な摂餌域、産卵地の点在といった要素から重要性を認識されている。



写真の説明：サンゴ礁の様子



写真の説明：サンゴ礁の様子

生物多様性の価値

価値（3）里地里山といった二次的な自然環境に特徴的な生態系が存する場

【場の概況】
本サイトの藻場およびマングローブは従来は自生してきたものであるが、近年では気候変動の激化等から減退が進み、藻場は囲い網の設置等、マングローブは植栽等の維持、回復を行っており、いわば里海として管理している。なお、これらの活動はブルーカーボンプロジェクトとして漁協と町が多様なステークホルダーと連携しながら実施している。

【主な植生】
ホンダワラ類による藻場、メヒルギによるマングローブ

【確認された主な動植物など】
藻場とマングローブにて確認される主な動植物は以下のとおり。

アオリイカ
ゴマフエダイ
アカモク
ホンダワラ
コアマモ
ヒゲワラスボ
ツルギハゼ
ミナミアナジャコ
ミナミアシハラガニ
メヒルギ

など



写真の説明：藻場の様子（白浜地区）



写真の説明：マングローブの様子

生物多様性の価値

価値（4）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【場の概況】

本サイトにおける藻場、マングローブ、サンゴ礁は、多様な水中生物の生息場所となっており、これを活用とした伝統的素潜り漁をはじめとする漁業による食の供給サービスを供給している。また、藻場、マングローブによるブルーカーボンの調整サービスに加えて、基幹産業である観光を支えるレクレーションや地域の子供たちにマングローブ植栽体験等の環境教育の機会提供といった文化的サービスを供給している。

【主な植生】

ホンダワラ類による藻場、メヒルギによるマングローブ、サンゴ礁

【確認された主な動植物など】

本サイトとその周辺で確認されている主な在来種は以下のとおり。
ホンダワラ
アカモク
コアマモ
メヒルギ
エダサンゴ（エダサンゴ属のサンゴには複数の種が含まれる）
ヒメヒライソモドキ
ケフサヒライソモドキ
チゴイワガニ
トガリュウシオガイ
イガカノコガイ

など



写真の説明：素潜り漁の様子



写真の説明：地元の子供たちのマングローブ植栽体験の様子
（マルハニチロ提供）

生物多様性の価値

価値（5）伝統工芸や伝統行事といった地域の伝統文化のために活用されている自然資源の供給の場

【場の概況】

本サイトを含む沿岸での漁業では、比較的に波が穏やかな静穏域を活用しつつ、豊かなサンゴ礁に悪影響を及ぼさない漁法として追い込み漁が行われてきた。

【伝統文化等の名称】

追い込み漁

沖縄県の糸満から奄美群島に伝わったとされる。伝統的にはサバニと呼ばれる小型の木造船を用い、スルシカと呼ばれる木の棒先に白片をつけて脅したり、音をさせながら威嚇して、仕掛けた網に魚を追い込んでいく漁法。潜水と網漁業の組み合わせで、魚群を確認しながら網に追い込むため、必要に応じた魚を追い込み、不要な魚は海に返すことが基本であり、持続可能性を考慮した先人たちの知恵に基づく漁業として今に受け継がれている。

【活用している自然資源】

小規模な木造船と漁網を活用し、漁業者が潜水して行う漁法のため、大島海峡の比較的に波が穏やかな静穏域が維持されていることが前提となる。また、漁獲する魚そのものが繋殖、生育するためには藻場、マングローブ、サンゴ礁といった本サイトを特徴づける自然が不可欠。大島海峡の環境を維持していくためには、気候変動や生態系の維持が不可欠であり、本サイトで取組む藻場、マングローブ、サンゴ礁の保全はそれらに向けた重要な要素となっているものと認識（ブルーカーボン生態系による気候変動や生物多様性への貢献が追い込み漁の前提となる大島海峡の環境保全に貢献している）。



写真の説明：追い込み漁の様子
（瀬戸内町X（旧Twitter）より抜粋）



写真の説明：追い込み漁による漁獲物
（瀬戸内町ふるさと納税クラウドファンディングサイトより抜粋）

生物多様性の価値

価値（8）越冬、休息、繁殖、採餌、移動（渡り）など、動物の生活史にとって重要な場

【場の概況】

本サイトに含まれる西阿室地区の海岸は、ウミガメの産卵場となっており、毎年、５月下旬～8月上旬にかけて、ウミガメの上陸が見られる。上陸個体数は年により変動が激しく、ここ数年は減少の傾向である。

【対象となる動物種とその動物種の生活史の内容】

・ウミガメ

ウミガメの上陸が例年5月下旬から8月上旬にかけて確認されている。本サイトにはウミガメが産卵する砂浜が含まれており、関係者での清掃活動により環境保全に務めている。また、ふ化したウミガメの子を保育するのは、アマモと海藻などの藻場であり、本サイトで取り組むブルーカーボン生態系創出の取組みがウミガメの保全にとっても重要。なお、町内の加計呂麻島の南東部の徳浜で本年2月10日にウミガメが上陸・産卵した痕跡が今季初確認された。ＮＰＯ法人日本ウミガメ協議会によると、国内で今季、最も早い上陸とされており、環境の変化からウミガメの生態も変化していると考えられ、注視が必要と認識。



写真の説明：泳いでいるアオウミガメ



写真の説明：産卵するアカウミガメ

サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容

１　藻場（①白浜、②諸数）
・ホンダワラ類の種を着床させるための投石作業を実施するとともに、当該海域の一部において、藻場の食害被害の原因となる草食魚類の侵入を阻止する囲い網を設置
２　マングローブ（③小名瀬）
・メヒルギの種苗作成と植栽を実施する（町内で漁業を行うマルハニチロと連携し、地域の子供たちとともにマングローブの植栽を実施）
３　サンゴ礁（④デリキョンマ、⑤安脚場）
・サンゴ礁を保全するためのオニヒトデ駆除とモニタリングを実施（町から漁協に委託）
４　砂浜（⑥西阿室）
・行政、地域が連携した海岸清掃を実施

なお、今回対象とする6か所のサイトでは、上記を織り交ぜながら保全活動を行っているものの、陸地と異なり海域はすべて接続されているサイトであり、これらを一体と見ながらも、各々の現況を踏まえた重点的（効果的）な活動を行うことが、限定された人手による活動を持続的にしつつ、周辺海域全体への波及的効果をもたらすと認識している。

モニタリング計画の内容

【モニタリング対象】
本サイトおよび周辺海域・沿岸部の生態系全般

【モニタリング場所】
サイト全域

【モニタリング手法】
藻場：潜水による実地調査
マングローブ：植栽場所での実地調査
サンゴ礁：潜水による実地調査
砂浜：清掃時の実地調査

【モニタリングの実施時期及び頻度】
藻場：4月、11月、3月の年3回
マングローブ：通年
サンゴ礁：9月、3月に各2回、計4回
砂浜：7月の年1回の清掃

【モニタリング実施体制】
藻場は鹿児島県水産技術開発センター・薩摩空撮合同会社、マングローブは海辺つくり研究会古川氏の指導を得ながら、行政、漁協、地域が連携して上記のモニタリングを適宜実施している。